者なり、

宇治拾遺物語、是も今は昔南京の永超僧都は、魚なき限りは、時非時もすべてくはざりける人なり、公請つとめて在京の間久しく成て、魚くはでくづをれてくだるなしまの丈六堂の邊にて、ひるわりごくふに、弟子一人近邊の在家にて、魚をこひてすゝめたり云々、非時を晝破子といふ、今日晝辨當なり、

〔高野御幸記〕天治元年十月廿六日己巳、未刻雨降、寅刻御厨子所供御盥御膳等、卯刻出御、初供麻履自茲捨車馬、始向幽邃峯、御歩早速、殆難追從、僧正行尊身體强健、行役無怠、耆年宿德之人、不泥徒歩之事、是多年修行之功、壯齡練習之力也、先是大僧都證觀遙指前程、兼就行路、丹生高野鳥居前、立五丈幄、中央間立黑漆大床子二脚、其上敷縹綱端疊二枚、其上供豹敷皮端錦爲御所、其左右敷高麗端疊爲侍臣座、午刻於此處供晝御膳、御座前兼供蒔繪手筥破子一合、御座定之後、公卿殿上人、依仰皆悉著座、兼居菓物、又追居檜破子、大僧正從僧設之、此間大僧正逐電前行、肩輿御箸下有仰、臣下應之、御膳畢供御手水、卽出御、

〔成氏年中行事正月〕一殿中ノ朝ノ御臺ヲバ、御サンバ計被召、大御所樣ヨリ御カヘリ以後晝御臺參、次ニ御椀飯、上古ハ酉剋計ニ始ル、近代ハ夜ニ入、〇下略

〔御湯殿の上の日記〕慶長八年三月廿九日、御れんがあり、御人數八でう殿、くげしゆう九人、しこうあり、折にてくもじ參る、ひるく御まいる、

〔醒睡笑六〕一延曆寺にて、下法師山へ行く時、兒にいふ、晝の飯をば棚に置きたり、九ッなりてあらばまゐれと敎へぬ、彼下僧案の外、常より早く晝以前にしまひてかへり見れば、兒の飯なし、是は不審やと問ふ、とく早くふたと、返事せらるゝ、いまだ九ッはならず、いかでかと申せば、いやけさ五ッ、さきに四ッうちたれば、九ッなつたほどにそれにくふたはと、